KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT

遠 1.4.1 3

# 長崎夜話卆三

## ○塔伽沙谷之事并國姓爺物語

塔伽沙谷ハ唐土東南乃海中に土佐國より多
く来ハ而もなく農民い其蕨を多く採て砂糖
を造る土中の民いと童として猿のゆくちろの
ごとく鉾を持て麋鹿を追さとりて其肉
を食し其皮を市に持て酒食ようて妻子に
売ふをもつて産業とし女人い絹木綿と織
之夕家毎に二百端三百端を常に貯へ積重る
を分限と煖國とす寒き國なるゆへ一

年毎の耕作にて米多く國内に乏しく
なるより紅毛人住居して平戸へ渡海の作りに
則ち紙臺灣に始め城郭を築き住居をし
うるに寛文元亭丑の年國姓爺福州泉州の
軍援兵をつかはして利を失ひ臺灣より責入紅毛を
追落し城郭を押取き住居に是より紅毛い
唄留吧より落ちて住居されど國姓爺いま
を名い鄭芝龍と云一官老と称して福州の
者なりしが明朝衰乱の時海賊の賊
徒をつかひ韃靼より不屬して呉三桂より通路



し海路の所々に徒黨多くとつて味方士平かさ
ゆくとして福建道紙討ちつかふ事あさつと海路
つかひ紙居く内を待く謀略をめくらし入い高
船に乗て數く日本の五島平戸長崎の間り
往来して年を経つり其内平戸より妻あり男
子一人孝つ又長崎より妻あり男子一人
あり其外いまだ福州へ渡海して軍旅を
ふる事なく屬徒漸く多勢に成く終に泉州
漳州を責取福建道を治め福州城を築て
居城し漸く盛あり十五省紙并吾ち

此時より到りて平戸なる妻子をも其船長湯
より入津し此旨関東へ注進ありて公儀の旨にて
平戸の男子十七歳なる紙長湯よりて秩長湯
より帰帆を其母に何よい行ど後より行しと
うや此男子後より鄭成功しつひ国姓爺と号をい
見たりよ立浦十官よりて者あり芝龍が舊友よ
して立浦より行括し領主の寵愛より偏く事とき
つゝ其一男子を鄭成功平戸小留め置く支
よす販り鄭成功日本の沖先を得て福別より
到るより臨て立浦一官ゞ子紙倡ひ行んて紙祢



うひ行より公をも沖懸慇あり其名より任をへて
この由事ゆて一官ゞ子鄭成功と同く出船を
別福別城内より入く鄭成功と二ゆより在て長崎
坐所を同して遊ゆること事城小四色の名
跡所く見ゆる道ゆ行南京西湖名小あり
いしめんといひてさ所く日ゞの沈之義を盡
きりといひても唯日本をあつゝ中ゆ行より心
ちゝゆゆゆゆ久しい強く眼を凡しいさ所く
留ゆ秩しゆゞ老親より事ゆせて紙より長湯へ
うゆゆ此おのゝ日本風俗あゆゆ清川氏

久右衛門と号し元禄年中まて在命下岳之多
福建道所々の物産国姓爺城中のありさま男女
乃風俗四季打続の儀式城内正朔えとみ門
戸ゟ松竹を儀ゟ之事日本のごく祝に
ゝぐひ鄭成功日本南部を慕ゟ乃意源ゟ也
中ゟ之ゟ是ゟ人ゟ福岡の間正月門松之
分不多ゝと同仕ゟ備鄭成功ゟ別服の弟を
長崎ゟあゟと福別ゟ人ゟ長崎
ゟ居住ゟ後ゟ国姓爺日本へ使船あゟて
援兵ゟ乞ゟ附却のゟ船人事を船ゟ人ゟ

公ゟの許ゟ不ゟて援兵ゟ之ゟ
ゟ人ゟ船ゟ使船ゟ日朝へ孫貨乃
音物ゟ受給ゟ人ゟ附国姓爺
ゟ福建道を平均ゟ南京浙江まで出ゟ
北京の帝都ゟ責ゟ北京城を責て江ゟ勝
利を得ゟ人ゟ難且の勢ゟ日ゟ牧ゟ
味方ゟ援兵ゟ人ゟ敗軍ゟ福別へ
引ゟ人ゟ呉三桂ゟ雲貴別の遠境ゟ在
ゟ援兵ゟ出ゟ事ゟ人ゟ日本ゟ援兵ゟ
叶ゟ人ゟ都て福別城ゟ難且ゟ責ゟ

鄭成功い泉州へ落行ぬ此時日本平戸より
つれ〳〵鄭成功の母い我日本を去る後
う未だ子孫の栄華を見んと欲して
たりかもむく此時よりあつて何の面目有てか
変を去て行くべき此事を思やいつて城
の樓に登りて自害しは下なる大河に落
入てこそ死よりれ日本女人のあらさるこの
めくなれい男子の武勇おとらぬと難且此
事勢みる古紙も紀なるべ国姓爺い志
つく漳州泉州より在しが〇〇〇〇〇〇〇〇



きれど厦門と云ふ一城を築く居住と
此漳州泉州の地を去事甚近く要害
至双の城地にて萬國へ乃運漕行るる所
なれい漳州泉州を捨て難且責ぶりしかも
此厦門を責る事不叶一旦みな国姓爺
の領にて家々厦門い元て其通る日本
此二十里小あまりさる所通て
ゆへ〳〵さる紙責取る二旦を領地にて附
を待て福建道を再領し大明乃世と再興
をんと欲ゆへ志し漳州きれい厦門乃名紙

故め思明州と号をいい明朝をそむいの意なり
又臺湾に名あり東寧と称をしを日
本にてこれを故郷を祝をし意なり国姓
爺智謀多奴乃軍將なり長崎人乃明
清闘記を委しく眼前にてをしたる
いとしいもしくと聞く知人もあけまべ
わるまうをて生をうが倍をしを
国姓爺の日本宮を六年の比東寧を
つまり其子錦舎遺跡を續て本国東寧を治
めおて清朝ゆをさがつ子をしが是を死



して其子奏舎なる相續して在しをしく
又祖父の例をを器量をを十五省を味方をく呉
三桂を死して遺族をしいかをくや
ゆをひをん清朝ゆ降参し東寧を開をて北京
ゆ到つを東海王を封をを秋廣大乃宅地を賜
つを今ゆ存をしや孫乃川の湖水いまに
と称れし世乃なが後をを常乃紀を常を豊
ゆをいをんや臺湾の事に付く書紀を寛永
乃比紀もいまを平戸へ入津をし内長崎代官
まつで氏異国没海乃紀を永乃海をを紀を永乃を

ところに紅毛海賊ありときゝつけ共長崎仕出の船
といふに付くはしくは遠慮もなくきたりや乱
暴を存ぜして船をおのきが船の艫に維ぎ
置く日本の酒食をくはさせ夜し鶻突ぎそて七
日が程ど苦しめさせ舟をはさしをおしておのきが
船に乗り移りなふしかれば紅毛て船のりも不
許石火矢の口をさしむく故かれば乗べき
中しもなく此度は酒手多くあたへ挨拶して
見る術くかくてゆるされぬ帰郷して此の末次氏
并奉行職よく召しつかれたは日本のお



それといふは其後日本の船悩まされ事ありし志
めんためとて浪人濱田弥兵衛同新蔵兄弟に
彼の紅毛の船を捕へ来るべしとて二人并通事
其外供人数十人相添られ臺湾へ渡り紅毛人も
船より様しき船乗りられ撿使を出し船中
の人数をあらため船をば城の楼の前に維
がせ石火矢数十挺の先をならべて置かれよ
り商人に拾へされば商物なしと色々そちを
それ仕かけて実の商人共を押しひ城中へも呼びて
日本の咄しも聞べしとて呼とり賣物道具大

かゝ和りくらふ小城をせゝるれも出て対面をしいゆく
觀くわしくうら祥にて曲録よりかゝり長くうふ足軍
ゆく拜礼をなし右乃賊船の事を言出して其
船人一人を得く帰しんとつゆゝせゝるれ大よ怒ら
立てとする伝弥兵衛引ゆゝ百く物を新船
脇指をぬきてせゝるれ乃腕をけりあく日本に来ら
るしやいるやといふよ城中の紅毛人見て府有よ
りけよ者も鉄炮を放さんとする府通事長
崎ちくらに海ゆうる人ゼゝるれ乃ちくつを放さんを
大音声ゆゝて岩々府皆く次蓋伝しそ言拾さ



ゆゝくゝゼゝるれ和ゝひ拾ゝていつふい日本の船伝懸
ませし人に今宴にあゝびまれも城を拾ゆ日
本よ行るび此国乱るべし新い吾一子伝質ゆし
日本へ遣とべし向後日本の船を掠を事ゆ
ゆゝに諸船よ命ゝ人ゝ右乃賊船も又穿鑿し
ゆゆ罰とべゝといひるれば則其一子を受ゆゝて
ゼゝるれをはゆゝまゆ板其質の子伝長崎へつき
来りて一ゝをゆゝ留ゆ置しゆゝゼゝるれ深く
罪と謝し平戸領主へも言ゆく詳ゝゆ翌年
平戸より帰帆乃船ゝのをてゝ人さしれ見よゆ

今に到りて紅毛人日本の下知を長く相違する
唐人より勝まり涙田足帛が日本人乃忠兵衛
い早く死し新敵い肥後より仕官して死ぬ

○紅毛船普陀山乱暴之事付紅毛船出火之事

紅毛人國姓爺より臺灣を奪ひ道恨高深く
是より唐土をうかがひ海上よりおのづから
わく唐土の船より金銀い別是を掠つく荷物を
奪ひ人を殺し海賊を專とせり長崎沒海
乃唐船海上に秋ゆえ紅毛船を見るに
猫を見るがごとくなるとし都て陸地の軍い紅毛

唐人なは對する事不能して軍船乃闕
りい中く唐人い紅毛より對する事なし是
偏く紅毛船唐土より来る事を恐る事[illegible]
ひ故より紅毛つよく唐土船欲しす寛文二年
乃はしや紅毛船福州寧波の間より到りて商賣
を新しくつくも許されを還さるるく荷物賣
ら價をくれざるもあるを憤り怨る事別
普陀山より到りて大銃を放ちて寺院堂塔を打
崩し佛具器財を乱奪して帰る故この船
寛文四甲辰の年六月下旬長崎の津より来る

明日い荷物なくなりて宵にきこえつる物の音より
煙おこり立出でられず飯炊く煙もなく足弱なる者
ども中にはなんと南くに黒煙紅色なりてくらく
立籠つきい扱い火災なりとこれなるあり紅色海と
なりて恐ろしき大銃二つ出つきいやなる紅色
らもなりは所なる家くにいたこめるまんと周
章大なるあれ計なる黒風なれば火のうはう来
らんい新ひなしいなはせんと出さんもあり已所
の刺史海面氏と安さんに物をして紅を津の奥
の所にあらはしと通事をもつて命



ぎ紙に紅色人別帆を掛られば紅いろに見出
紅い火焔紅色なりて紅いろに成
流れる所に留りぬ恐ろしき大銃なれば紅色人なく
筒口より水をもてくう入れく火口より鐵行を
出すこと中ごさのこれるなり
つまり中焼物さまり帆柱し焼倒まてなり人除
多もきなて水きはなり下のなり紅うちをし水
をうけて荷物多く強うあされと紅色の横い駄
し是普陀山観音の仏罰なりと法人いひあり
なり紅色人いなく物なるなりたれ

○巴旦人日向國漂着之事

延寶の比や日向の国乃海ちかき所に一艘人数十八人あるゝ漂ひ来る別るの地乃領主より長崎へ注進申日向と長崎の間海上遥かに隔て日数多く経て来りぬ十八人の内十二人は海上にて病死して残る者共六人長崎に到りて公儀の旨を伺て通事を集めてものいひをそいはくれ国をいかなる所に唐土南蠻の方乃詞をもつて問ども答へず天竺南蠻の方乃詞をもつて問ども答へず紅毛人やらんとて紅毛人を呼出して見則ちかの紅毛人を見てはじめ驚き怪しみて答へる事もなくて海上の船をうばうものゝいひくれどあへて答へざるゆゑ紅毛人とそこなひいるの国紅毛人遠くへわたりて通事基世男乃国を拾まうてひきこんをして紅毛い家にて ゆびさしをして物のをいつづけゝゆびさしをして見て物語るさまを海上にて唾吧のあうとはなくとなく一時よりゆびさしつゝぐんぐんくひこんでさて巴旦国の人かうとをたれまて

其除の幸いまるべきさゆゑもなくてぞあるまろ
けん人日幸れ夫をうくいかひひろーて料理と
考へ給ひ鶏家なりとは合へてもさび魚新
合ととつくも夫と合ろぬくよいかひどど牧月
逗留の間ゆ六人も次第に死して残りたく二人
帰帆の紀も和このたくうくされぬ海とてえ人
いるしらわゆえし見名の煖国肉合とぬろ
ゆ人日ゆ短命ちりいくんや犬肉い温熱お過乃
物妄りゆ給ひて寿命を損ろ事をきに至
愚卑陋の風俗論ろゆ不及いくんや牛馬犬



鶏ハ日本の水土に化しそい合毒夫死あらん事
うの道理あるべし

○異国紀漂着多事付薩摩夜久浦異人之事

上代の民い衣食の和に味わある事ゆしかり
おろくわのり国紙ゆ国のみろう
を求ひろるすちく欲寡ーて高静ちりし末
代ろ到ってそおのゆ紙不足ーて四方乃国ろ
うもあるて到ってあらんゆもわび港ゆ紀ろ
千里をも遠しとさびたそたろ海ゆゆ一葉
舟を宿ろ波のあるもと消くもいくねさゆ

そもそもこれ海を渡てさはりの行ひ
やすきゆへ日毎に異国の船乗人間をれい
海の神と人の乗あるを和らぎ鎮めさまば
此日本いかなる水土けよろしきゆへ世界の
そこなくいつまの国人ひとしなみにてらしまさ
らん紅毛天竺うつる人の外い来りる事を許され
ぬい何ゆへは幸よせて南海の浦濱小舟よし
こそ作らうめ数きしいづこ寶永の比や
羅媽國邪法の信呂宋より来り居く彼地の船
り来ふく日本蔑庭久の時よりこの方一人

私より初めて来りし私いづれもこれ人おしけ
一人日本の風俗を似せて月額を剃日本の衣
服をきて刀一腰をさし初めいと申ばかり居て
私未だ人入い炭焼の翁ぞ日本詞よ多
合物なとむてこの價よ金子なとをとりて
て始めさに世ひ弱り實の日本人のこと
ちりされい其上家の長よ告げ所に商仕ありれば
人をる恨しくおりひて作り國主のもれ実て
東役の土わまさし遣いしりとて祝て長崎へ
をりゆもあ其人物毛髪いろくして行ものと

くに赤らかに眼も行き人の目れさはりあるべ
ひ日本の人と共れしく鼻のとがりて高く色
同じく孫是いつらやらん唐の邪ふの法にて
世界万国の国を邪ふをもてめりあるくくの
なるべきまさりぬ中に日本に来りる也
日本の詞をそこらくづくづく言く通事を不
解ゆや日本詞をさはく書付ふり横文字なれ書
一無常にもなるべきず特く是紙ひきみて急
射さしめをゆおそろしき事ふわるべ也異人
則長崎より江戸へ送りはらいされ獄屋に入あり



きてそなの事に知人をしり日本海をのり不く
文よりつく用心をはてくりぬへ一変よ
角西薩摩日向四国紀州その浦くいつきの
日にり呂宋に私乃漂ひ来んも孫ば常世
辛り安くく来るくく常世の浪乃ちさ治
よりるむまし国とそりて特をりも是名の蠻地
南海よ塞つる常世の風をつそあるこそつめを口
おくくし都て邪ふい金銀をあるくく多人を
引入くくや右乃異人も黄金特わくくちち拓
くくくく

○蠻人紀州に漂流之事并呂宋國之沙汰

右の番夷二人をの夏伊勢の國乃ナ二人とう
ゑ乃浦に流れ寄り同さ四月を呂宋
乃浦より紀州熊野浦に流れ寄る人たち三人
有り乃紀長崎にて此れ和國と申渡
十一人なりし海上にて八人い死しなりて見る
紀毛和乃帰帆より伊勢にて任めんすると敢
ら蛮べしと命をし秋めるぞ都て呂宋國い東寧
乃南琉球の番に在く熟國なり蠻人押領の
所にて亜媽港同和乃の為なりゆへ日本れ通路禁

止ゆへい漂流乃和人を誅し給へしと申ものなり
漂ひ流れ人ゆへ指く罪科なれば殺し
給ひとゆへ給へい日本れ仁政のたぶしなりめ唐
人い評しなり和は呂宋國日本九州の大名過
ゑ豊後をれいしなり来領主松倉氏呂宋伝
代の志しなり長崎の旅館にて幸死あるし
ゆへ其事止めるぞ都て呂宋給い日本西南
乃海に塞つく屬類乃小船多くれば日本南
海を流る大和年毎に風に放されぐさるゑ
ゆゑ帰れるぞ多くて此れ給へ漂ひ

そもそもこれらの人は清時日本屬下となり
人物ともに比類なきに人和人多くい此清の人
は教されたるとなりてあれたり南海を乘り和
い此時の紛擾(そんろ)絶(たえ)くなりしかるべしや

○日本和異國漂流近代多事

あるは寛永二年伊勢國の小日本和異國に漂
流せし事近代寛文乃比長崎伊南佐
村にて西乃浦人二人小舟に乘て五清人幼人と
とも沖漂して逆風に吹流され臺灣に漂ひ
はるかに南海の唐和よりとりて帰此



又同じ比慶乃和十餘人廣東の雷州に漂
流して数月の後長崎浦の唐和にてそれ
ぞれ本國へ送る又延寶乃比や尾張の
國乃和是も廣東國の間に漂流し長崎
入津の唐和とともに乘て長崎より本國
へ帰されぬ此かの紙多くかぐ元しう
又ちなれば西德年中統後久留米の和十
人くらいまくに長崎へ来るべき津乃沖にて大
風に敗されぬ数月乃和大洋に漂ひ風小海
をそなるとこれ漂ひ来たりは

衆多く積て飢死する事いわんや海を渡り廣
寒国なる潮別水深きして其地の守護よ
り始めて其細なる紙筆張館
水数月留り長崎浦海の唐船よりさし長
崎よりそれ人おのに領主の使役一
人宰府へ参詣の事共内々
通用を事とあるべしおりと韓文公の
廟の碑の拓なと写して来りしとや右の志
なくいつまて日本通路の国なれば
事成得るはか浦海の船もあれ国



帰る事を不得して死もあり
多くの人水の江の浦海に子い三百餘歳と経て
帰るも一時の老み迫りて悔くそ
国して帰る事なく人の国を所と絶
いわんなるこのうれしく安信仲磨い
ものもろこしに海を渡り長崎
十年いわては帰る事もわそ齢ひ七十
餘りあくはあよ唐土の生まれ
長ならるものやしかるに都て学
いかのあるものそう教めて所を拾う家

を為ち釈迦仏人君あるんさあれあり
ちやちるふ家紋口とれ国を捨て人は国り
ちし出ていく身を捨りしい浦浜ちるに恥さう
りや仲磨ち乞いていちるし後恵清河い在唐
十二年ちるし程ち二人れ女子あるしとちるく其
身い帰朝をしグ後はしもとうち四家の法遺唐
使の船れ帰ちふ乗りて日本へ来りんして沈み
松浦深迫ち海ち大風ち遭て船そこ打れ
水こみと成く百餘人船のたち乗り板ふ切付
居く漂く天草沖の浦ち流ち流れく命の

くいきち吉備公ち天草浦ち漂ち流ちあるし事古
記ちこちるち出天草浦の西ち長崎ちちるり七
八里ち程ちそいち迫しいち浜唐の人僧ち俗ち
長崎の津ちちるち人ちしちち多ち乗ちん
清河乃姫い後人ち嫁して其ち孫人ち乃公ち
わるちちや